挫折した仕事・やりかけの仕事

野　崎　昭　雄

かつて、集書ジャンルのひとつとして、作家を除く日本人の日記や紀行・ルポルタージュを対象としていたが、そのなかの1冊、清澤（きよさわ）　洌（きよし）著『暗黒日記』に目を通していたことがあった。これは、35年ほど前の話しである。

清澤　洌は、1890（明治23）年2月8日、長野県に生まれ、小学校卒業後、内村鑑三門下の井口喜源治が設立した研成義塾に入り、宗教・道徳上において謹厳・厳格・潔癖を求めるピューリタニズム（清教徒主義）の影響をうけた。16歳で渡米し、邦字新聞の記者を勤めながら、ホイットウォース・カレッジで政治経済学を修め、1920年に帰国した。帰国後は、『中外商業新聞』外務部長、『東京朝日新聞』企画部次長を歴任したが、『自由日本を漁る』のなかの「甘粕と大杉の対話」という架空エッセイーにより、右翼の反発と攻撃をうけたため朝日新聞社を退職して、フリーの評論家に転じた。その後、中央公論社の嶋中雄作、東洋経済新報社の石橋湛山などとの親交で、リベラリストの立場を堅持し、自由主義的外交評論を展開した。しかし、日米英戦争開始後、軍部に批判的であった清澤の言論活動は、極めて不自由となった。

この不自由となった期間、清澤は戦争・軍部・右翼に対する痛烈な批判を、日記のなかで展開していた。これが、1954（昭和29）年6月、東洋経済新報社から、『暗黒日記』（1冊）と題されて刊行され、高い評価をうけた。日記の執筆期間は、1942年12月から1945年5月までであるが、1954年刊行版は、日記編者側で、清澤の私事にわたる部分、比較的重要でない部分を削除して刊行された。その後、日記全文は、評論社から「復初文庫」3巻本として刊行された。

私が読んでいたのは、1954年刊行のものであった。読み進めていくうちに清澤は、『読売新聞』や『毎日新聞』紙上に掲載されたユダヤ人排撃記事を取り上げて、新聞社や記事内容を批判し、あるいは陸軍を中心とした軍人によるユダヤ人排撃集会を取り上げて批判する内容が散見するようになった。

なにゆえに、ユダヤ人を排撃していたのか、日記から察するに、排撃者たちは、アメリカ資本主義経済を牛耳っているのはユダヤ人、共産主義思想家マルクスもユダヤ人、したがってユダヤ人を排撃することで反米・反共をあおり、一般民衆の戦意を高揚しようとしていたのである。むちゃな民族差別が、まかり通っていたものである。

ユダヤ人といえば、ヒトラーの大虐殺を想起する。そして、われわれは、戦後も、この大虐殺を対岸の火事のようにうけとめてきている。はたして、そうだろうか。われわれも、ヒトラーほどでないにしても、ユダヤ人に対し戦時下において、差別的な言動をとっていたのではないか。この仮題から、調査に関心をもった。

大学時代の指導教員であった稲生典太郎教授は、日本近代外交史が専門であったが、授業の合間に書誌学についても教示され、また、神田古書店街を散策する面白さも教えられた。そのこともあり、さっそく古書店巡りを始め、文献収集にとりかかった。指導教員からは、1件のテーマに対

して、最低100点の文献を収集すれば、なんとか一つは、ものがいえるとも教えられていたので、ひとまず、最低点数は収集するつもりであった。『猶太禍の世界』『猶太思想及運動』などといった著書は、誰も関心をもつものはいないため、ゾッキ本で、店頭のワゴンに無造作に放り込まれていて、1冊100円か200円ていどで買い集めることができた。ところが、ある時期から、1冊が1,000円、2,000円と値上がりした。あるとき古書店主に、なぜこのような古書が値上がりするようになったのか聞いてみると、某大学の教授が、この種の著書を買い集めるようになったためではないか、とのことであった。自分の懐具合では、つぎつぎと買えなくなってしまった。このことと、仕事先から神田古書店街が遠くなったこともあって、自然と収集に熱がはいらなくなってしまった。それでも、なんとか40冊ほどは収集できた。これでは、何も論及できない。しかも、1937(昭和12)年から1944年までの間に出版された、この種のものの点数からすると、九牛の一毛にも値しないものであった。さらに1982年、宮沢正典同志社大学学芸学部助教授(当時)が『増補ユダヤ人論考』を刊行するに及んで、一挙に収集熱が冷めてしまった。これが、挫折した仕事である。

やりかけの仕事とは、「太平洋戦争」という名称への疑問である。一般に、1945年8月15日に終戦を迎えた戦争を、「太平洋戦争」と称している。しかし、マスコミにおいて、この用語を使用するとき、その定義が極めてあいまいな場合が多い。往々にして、「太平洋戦争」というとき、日米戦に限定しているかのようである。1941年12月の開戦は、日中戦争が継続しているなかで、アメリカはもとよりイギリスに対しても戦端を開いたのである。当時、政府は、この開戦を「大東亜戦争」と称していたが、まさしくこれは、中国大陸をめぐる東アジア戦争であったのである。

「太平洋戦争」という用語が使用されるとき、往々にして、その意味合いが、太平洋地域で展開された戦争、日米戦のみを指しているかのようである。そして、日中戦・日英戦を風化するかのように使用されている。これに、疑問を抱いたわけである。私自身、いまだ十分な検証はしていないが、終戦時の戦争名を表現する場合、「アジア・太平洋戦争」という用語を使うことにしている。つぎに疑問を抱いたのは、いつから「太平洋戦争」という用語が使用されるようになり、なぜこの用語が使用されるようになったのか、ということであった。終戦後、連合国軍総司令部は「大東亜戦争」という用語の使用を禁止した。したがって、戦後、マスコミ関係は、「今次の大戦」という言葉に置き換えていた。

仕事が忙しくなり、思うようにこの問題を解決するのに、十分な時間を割けない状況であるが、少しずつ進めているのは、戦後の新聞記事内容の点検である。見出しだけでは不十分であり、すべての記事内容を1件ずつを見ていかなければならないので、たいへんな作業である。この作業で、いつから「太平洋戦争」という用語が、登場するのかが当面の目標である。新聞記事の点検が終了したら、刊行された日記類、ついで教科書という順番を考えている。そして、「太平洋戦争」という用語を使用するようになった意図を、つぎの調査の課題にしようと思っている。

(のざき　あきお　東海大学)